
星降る森の盟約

橘川芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星降る森の盟約

【Nコード】

N5780Q

【作者名】

橘川芙蓉

【あらすじ】

砂漠の国ベツヘルム王国にすむネリーは、数いる兄弟姉妹から言われのないいじめを受けていた。家で覚悟で暁の森にでてきたネリーは、そこでエルフ族の絶世の美少女と出会う。…自分の道をさがす手がかりを見つける異世界ファンタジー

(前書き)

「錬金術師ネリー」シリーズのお気に入り百件登録記念短編です。

本当、ほんとにほんとう！あんな家、絶対に出てってみせるっ

私は一度後ろをふりかえり兄弟姉妹の誰も追って来てないことを確認した。

私の家は、代々宮廷魔術師を輩出する上級貴族の家柄で、兄弟姉妹みんな宮廷魔術師になるのが当たり前という期待を親戚一同から寄せられている。

そのウズ高い期待に、私以外の兄弟姉妹はなんなく応えている。

私だけは、応えられない。

どう頑張っても、私は魔術が使えないのだ。なんで、出来ないのかはわからない。

でも、みんなと同じようにやっても魔術を使えた試しはない。

なんで、兄弟姉妹があんなに簡単に魔術を使えるのか私にはもっとわからなかった。

魔術が使えないということは、一族の中でも珍しいようで、兄弟姉妹たちはなんの抵抗もしない私を、新しい魔術の的にした。

何度も死にそうな目にあっているのだが、両親は兄弟喧嘩としてしか受け取ってくれなかった。

いかに、兄弟喧嘩じゃないと、一方的に魔術で攻撃されているといっても、「仕返しのできない優しい子、だけど仕返しのできない根性なし」と叱られた。

矛盾してる！

今日も新しい魔術の試みを思いついた一番上の兄であるリーンが、私を標的にした。

リーンの手から燃え盛る炎が出て、一直線に私に向かってくるのを命からがら逃げて来た。

昔は、迎え撃とうと罫をしかけたりもしたが、今は全力で逃げ出さないと命が危ない。

いつもは、プチグレン家の領地にある屋敷に住んでいるから家が出るのは難しいが、ここ数日は家族旅行で王都の上屋敷に滞在しているので、家から出やすい。

さすがに、暁の森までは追ってこないみたいだ。私は、走る足を止めて森の泉のほとりに座り込んだ。

この泉は、小さいものだが森の動物や迷い人などが喉の渇きを癒している。

まだ見たことないけれど、暁の森の奥に住む妖精も飲みに来ているかもしれない。

私は、緊張が溶けたせいで喉がカラカラに渴いていることに気がついた。泉に手を入れて、冷たい水を掬い上げて飲んだ。

「誰か、いるの？」

泉を囲む茂みから声が聴こえた。知っている人の声ではない。

茂みががさがさと揺れると、中からひょっこりと少女が顔を出しだした。

歳の頃は、私よりも少しだけ年下のようだ。びっくりするほどの可愛い顔だ。美少女という言葉がぴったりだ。

ただ、普通の人間とちがうのはその先の尖った耳だ。

もしかして、この子妖精族なのかな？

「わ、ヒトだ」

妖精族の女の子も、人間を見るのは初めてみたいで大きい目をさらな大きくして驚いていた。

茂みから出てきた女の子は、不思議な模様が刺繍された服を着ていて、袖口からは繊細なレースが覗いている。色の薄い金髪で、全体的に華奢な印象だ。

こういう女の子が、人間の英雄と恋に落ちるのかしら？と、前に読んだ英雄物語を思い出した。

物語では、妖精族の美少女と人間の英雄が恋に落ちて、苦難の末幸せに暮らす話だった。

「ね、ヒトなの？」

妖精族の女の子は、好奇心旺盛のようで私の前まで歩いてくると同じように草の上に座った。

「うん、ヒトだよ」

「そうなの！やっぱり、初めて見た。耳が丸いのね」

「貴女は、妖精族？」

「そうだよ。尖った耳の一族」

女の子は自慢げにその先の尖った耳を撫でる。

「私も、初めて会ったわ」

「ね、ヒトの世界のこと教えて」

彼女は好奇心が旺盛で、人の生活に興味があるらしい。

彼女と日が暮れるまで、人の世界のこと妖精族のこといろいろな話を話した。私が本当は魔術が苦手で、魔術を使わない仕事について独立したい事、意地悪な兄弟姉妹の事、誰にも話せていない事を言葉にする事ができた。

「人の子はそうやって悩むのか」

「妖精は悩まないの？」

「分からない。生まれた時から、王になる事を決められていたから。違うモノになろうと思った事はない。やりたい事とやらなければならぬ事が、一致しているから」

彼女は、妖精の王族みたいだ。しかも王になると決まっているだなんて周囲の期待も、妬みも全てその体に引き受けているのだ。

私と、違う。

「でも、やりたい事とやらなければならぬ事が違っていたら、一致するまで捜すよ。世界はそういうものだから」

彼女は不思議と私よりも大分年上に見える笑みをみせた。妖精は、外見年齢と生きた年数が一致しないと言われていたっけ。

私は、探せるのだろうか。

私のやりたい事と、やらなければならぬ事が一致するような事が。「答えは、意外と近くにあるかもしれないよ？」

何でも見通しそうな澄んだ瞳で彼女は私を見つめた。その瞳に引き込まれそうになって、じっと見返した。

やがて彼女は頬をうっすらと赤く染めた。

「そ、そんなに見ないでよ」

「あ、ごめん」

確かに不躰だったかも。

恥らうように俯いた彼女は、絵の題材になりそうな花の乙女だ。

そろそろ家に帰らないと、真っ暗になって歩くのも困りそうな時刻だ。

妖精と私たち人は、違う時間を生きている。二度と会う事は無いだろうけれど、今日会えた事に感謝しよう。

私が別れを告げると、彼女は先ほどよりも顔を赤くして私の手をとった。

「僕と結婚してくれないか」

私は、妖精に言われた事を理解するまでに口を大きく開けたまま彼女を見返していた。

花の乙女のようなだと思っていただけけれど、もしかして、女の子じゃなくて男の子だったの！

「結婚って」

「君を気に入ったんだ。妖精と人間の結婚は珍しくない」

「えーと……男の子よね？」

「そうに決まってるでしょ！何だと思ってたの？」

そう言われて、よく見れば女の子にしては筋肉質……に見えるかつ！全然、女の子にしか見えないよ。

「お互い良く知ってからのほうがいいと思うよ。私、大人じゃないし」

私が、色々言い訳をしていると彼は私の掌に光の精霊を使って魔方阵を描いた。

初めて見る精霊魔法に見惚れる。

「汝の血の盟約は、血よりも濃く水よりも清く」

彼が呪文を唱えると、魔方陣が光だして手の上に浮いた。

「血の盟約を交わそう。そうすれば、僕達はいつでも会えるよ」

「血の盟約で一生に一度の事なんでしょ？ 私でいいの？」

「君がいいんだ」

名前の知らない私で良いと言うだなんて、この妖精酔狂だ。

私も、人には言えない事を言えた妖精と二度と会えないのは寂しい。どうせなら、私が見つける何かを見ていて欲しい。

私のやりたい事とやらなければならぬ事が一致する何かを！

私は先ほど彼が唱えたのと同じ呪文を繰り返した。

「契約者の名は、深き木々の葉の子ゼラ」

「契約者の名は、ネリー・プチグレン」

私が名前を言い終わると、魔方陣が私の手の中に消えていった。

光の全てが私の掌に消えていくのを見届けてから、私はゼラを見た。同じようにゼラも私を見ている。

「これからもよろしくね、ゼラ」

「もちろん、よろしく僕のネリー」

辺りは、先ほどよりも暗くなっている。

まずい、早く帰らねば。

昼間、家出しようと思っていた事は、すっかり忘れている。家出をして逃げるのではなくて、私の道を決めて独立したい。

何がしたいのか、分からないけれど血の盟約に恥ない私だけの答えを見つけて、ゼラに報告したい。

私は、暁の森の帰り道夕陽を背に浴びながら城門をくぐり家へと帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5780q/>

星降る森の盟約

2011年4月3日07時13分発行